

## 教員養成支援の手がかりを求めて Ⅲ

—令和元年度埼玉県小・中学校初任者研修者へのアンケート調査から—

安原輝彦 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

**キーワード**：埼玉県公立小・中学校初任者（令和元年度）、初任者研修受講前アンケート調査、初任者研修修了後アンケート調査、教職に対する意識、教職支援への手がかり

### 1. はじめに

文部科学省が公表（平成 31 年度 4 月）した全国の「平成 30 年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について」<sup>(1)</sup>によれば、全国の教員採用試験結果の状況は以下のとおりである。

- 受験者総数は 160,667 人で、前年度に比較して、5,401 人(3.3%)の減少となっている。
- 採用者総数は 32,986 人で、前年度に比較して、1,025 人(3.2%)の増加となっている。
- 競争率(受験者÷採用者)は全体で 4.9 倍で、前年度の 5.2 倍から減少。

であり、校種別では、以下の表のとおりとなっている。

#### 【受験者総数】

・小学校	51,197 人 ( 1.8%減)
・中学校	54,266 人 ( 5.7%減)
・高等学校	32,785 人 ( 4.1%減)
・特別支援学校	10,837 人 ( 3.1%増)
・養護教諭	9,696 人 ( 1.5%減)
・栄養教諭	1,886 人 ( 4.0%増)

#### 【採用者総数】

・小学校	15,935 人 ( 6.1%増)
・中学校	7,988 人 ( 3.1%増)
・高等学校	4,231 人 (12.3%減)
・特別支援学校	3,127 人 (11.8%増)
・養護教諭	1,451 人 ( 9.3%増)
・栄養教諭	254 人 ( 6.3%増)

#### 【競争倍率】

・小学校	3.2 倍 (0.3 ポイント減)
・中学校	6.8 倍 (0.6 ポイント減)
・高等学校	7.7 倍 (0.6 ポイント増)
・特別支援学校	3.5 倍 (0.3 ポイント減)
・養護教諭	6.7 倍 (0.7 ポイント減)
・栄養教諭	7.4 倍 (0.2 ポイント減)

#### 【採用者：教職経験者、民間企業等経験者】

・教職経験者	53.0% (3.3 ポイント増)
・民間企業等経験者	3.9% (1.9 ポイント減)

なお、教職経験者とは、採用直前の職として国公立の教員であった者（非常勤講師も含む。）、民間企業等経験者とは、採用直前に教職以外の継続的な雇用に係る勤務経験にあった者。

一方、埼玉県の状況については、教員採用の競争倍率は令和元年度実施の採用試験では小学校 2.8 倍（昨年度 3.3）、中学校は 5.7 倍（昨年度 6.6 倍）であり、校種別でのそれぞれの状況は以下のようなになる。埼玉県の状況（志願者、採用見込み数）<sup>(2)</sup>

#### 【志願者数】

・小学校	2,119 人 ( 11%減)
・中学校	2,103 人 ( 6.7%減)
・高等学校	1,784 人 ( 9.7%減)
・特別支援学校	486 人 ( 3.3%減)
・養護教諭	344 人 ( 2.3%減)
・栄養教諭	96 人 (10.3%減)

#### 【採用見込み数】

・小学校	760 人 ( 5.6%増)
・中学校	370 人 ( 8.8%増)
・高等学校	240 人 ( 25%減)
・特別支援学校	486 人 ( 0 )
・養護教諭	344 人 ( 0 )
・栄養教諭	96 人 ( 0 )

ここ数年の埼玉県の教員採用試験、特に、小中学校教諭においては概ね採用見込み数が増えて

いるにもかかわらず、志願者数も減少しており、試験倍率も低い傾向が続いている。

本学部に入学者となる学生たちの意識調査<sup>(3)</sup>でも、入学時には9割近い新入生が教職を目指すという意識で大学生活をスタートするのだが、ここ数年の状況は実際に教職に就く卒業生は約半数という結果である。

教職という専門職を目指すことから教育実習と教員免許の取得が卒業要件である本学部に入学者となる学生たちが無事に単位を取得して卒業要件を満たしながら、実際には教職に就くものが約半数であるという現実、教員養成をミッションとする本学部の教育にとっては大きな課題であると考えられる。

平成28年度に文部科学省が実施した教員の勤務実態調査<sup>(4)</sup>をはじめ、マスコミ等によるいわゆる教員の長時間労働や残業時間、過労死問題の報道<sup>(5)</sup>は大きな社会問題として取り上げられ、各自治体による働き方改革への取り組み<sup>(6)</sup>も始まっている。教員を目指す学生や若者たちもこれらの教員の働き方や勤務実態への関心は高く、理想と現実の狭間で不安や心配を感じることも少なくないと思われる。<sup>(註1)</sup>

そこで、大学での教員養成課程に関わる実務家教員の立場にある一人として、教師教育の観点から、新採用教員の教職についての意識調査から大学の教員養成課程で学ぶ学生たちの今後の学びにとっての手がかりを探るものである。

## 2. 研究の目的

平成30年度実施の教員採用試験に合格後、名簿登載に従って856名(小569名、中287名)が小中学校新任教員として、平成31年4月に埼玉県内小中学校へ赴任し、条件付き採用期間での初任者研修に参加するとともに、1年間に及ぶ教員経験を経て、教職の第一歩を踏み出した。

本研究は埼玉県内の新採用教員としてスタートする時点での不安や心配に関する意識と、1年にわたる初任者研修、及び条件付き任用期間を経た時点での、彼ら自身の初任者研修や初任者としての教員経験の意識を調査したものである。

特に、新採用教員としてスタートした1年目の「教職への不安や心配」、「教職へのいわゆるブラック感」、「離職への意識」「学生へ教職を勧めるか否か」等のアンケート結果をもとに、教職を目指す学生たちが大学での学びの中で現在の教職が直面している課題や教職への不安について考え、それらの課題や不安を乗り越えて将来、学校現場で活躍するためにはどんな資質や能力を備えるかといった教員養成の支援の手掛かりを探ることにある。

## 3. これまでの研究から

一昨年度(平成29年度)<sup>(7)</sup>、昨年度(平成30年度)<sup>(8)</sup>も同様に、埼玉県の初任者研修参加者に、アンケート調査を行い、大学における教員養成課程での教職支援方策への手がかりを求めて、教職の第一歩を踏み出した初任者が教職への思いや悩み、職場での経験を探る調査を行った。

特に、一昨年度、昨年度の調査では、「離職意識」を中心に調査した。この2度の調査においては、「離職」への意識を抱いた時期はあったものの、初任者研修を終えた者と、反対に、「離職」への意識を持つことなく初任者研修を終えた者との教職生活への不安や悩み、やりがい、負担や多忙感についての意識にどのような相違があるか、さらに、困ったときの相談相手などを調査した。また、初任者期間を終えるにあたって、今後、教職を目指す後輩(大学生)へのメッセージを記述する中で、彼らの教職という仕事を振り返っての思いや考えなどを調べ、大学での教職課程で学ぶ学生たちへの支援策を探った。

今回の調査は、初任者研修初回(小学校、中学校合同開催)に、「教職選択の理由」「スタート時の不安や心配」「不安や心配を持つに至った理由」、そして、教員の働き方改革等で議論されているいわゆる教職のブラック問題「ブラックな仕事」についてなど、これから新採用教員として教育現場に立つ前の意識を調査した。そして、約1年間の初任者としての勤務を終えた条件付き採用期間を経ての「教職の不安や心配」「不安や心配に足しての対応」「離職の考え」「学生への教職への勧め」などの意識を調査した。

## 4. 調査対象者の概要

#### 4-1 令和元年度埼玉県小中学校初任者教諭の概要

##### (1) 令和元年度校種別初任者研修対象者

人数	小学校			中学校			合計		
	男 251	女 318	計 569	男 171	女 116	計 287	男 422	女 434	計 856

##### (2) 臨時的任用教員等経験者（非常勤講師等は除く）

	小学校	中学校	計
経験者（11か月以上）	264名	153名	417名
臨任率	46.4%	53.3%	48.7%

##### (3) 担任等の状況

	小学校	中学校
第1学年	3	86
第2学年	178	39
第3学年	157	8
第4学年	158	(複式学級) 1
第5学年	48	
第6学年	1	
特別支援学級担任	24	19
副担任	0	134
計	569	287
担任率	100%	53.3%

#### 4-2 初任者研修会プログラム

平成31年度（令和元年度）の埼玉県小中学校等初任者研修会の研修プログラムは、計15回実施され、例えば、小学校の初任者教諭には、第1回の初回（H31.04.03）には、①今、教師に求められているもの、②服務規律と不祥事の防止、③社会人としてのコミュニケーションマナー、④学級経営の基本と保護者との連携、⑤教員のためのメンタルヘルス、⑥人事評価制度についてなどの内容で進められ、最終回の15回（R1.01.28～02.06）には、①特別活動の内容と指導の充実・学級活動の時間の展開、②学校の安全と防災、③国際理解教育の意義と実際、④「主体的、対話的で深い学び」の視点からの授業改善といったプログラムで実施された。<sup>(9)</sup>

なお、小中学校の校種別に研修は実施されるが、プログラムの内容は学習指導、学級経営等で校種の特徴により内容はそれぞれ異なるが、概ね共通の研修プログラムである。

#### 4-3 「新採用教員アンケート」（埼玉大学教育学部 安原研究室）

平成31年度（令和元年度）の埼玉県小中学校等初任者研修会受講生に対して、初回の4月3日及び最終回（R01.01.28～02.06）の2回にわたってアンケートを実施した。ただし、回収方法が1回目と2回目の調査では異なって、1回目はほぼ全員の初任者の調査用紙を回収できたが、2回目の回収に当たっては、研修会参加者の約8割程度の回収率であった。したがって、1回目と2回目の総数は一致しないが、サンプル数としては比較可能な範囲にあると考えられる。

##### (1) 新採用教員アンケート（2019.04.03実施）

新採用教員研修会初回の4月3日においては、すでに配置校での各自の校務分掌は受講生全員が校長から拝命を受けているが、担任、部活動担当顧問以外の分掌の担当内容については詳しくは把握していないと考えられる。また、入学式、始業式を控えた時期で今後担当するであろう児童生徒との接触はまだこの時点ではほとんどない状況である。

主な質問内容は、教職を選択した時期、教職を選択した理由、教職スタートにあたっての不安や心配などについての思いを尋ねたものである。（資料1）

**(2) 新採用教員アンケート（小学校 2020.01.28 1.31 中学校 01.30 02.06 実施）**

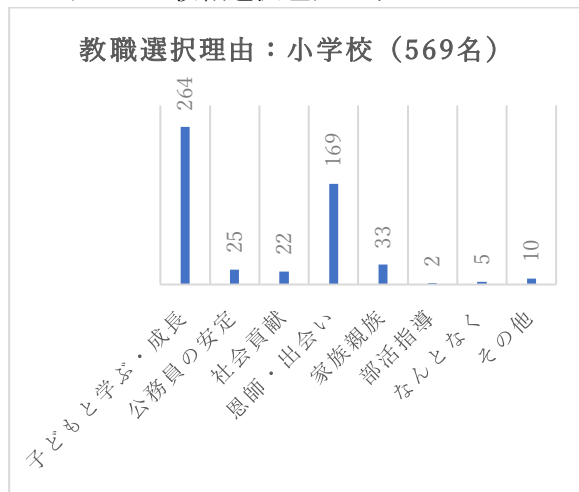
平成 31 年度（令和元年度）の初任者研修を修了した小中学校教員に第 15 回目となる最終回にて、アンケート調査を実施した。（但し、最終回は小学校、中学校とも 2 回に分散して実施され、アンケート用紙を研修前に配布、研修終了後の解散時に各自が回収箱に投函する方法で実施）主な質問内容は、教職生活での不安や心配だったこと、不安や心配だった時の相談対応、離職意識、学生への教職の勧め（賛否）及びその理由等である。（資料 2）

**5. 調査結果**

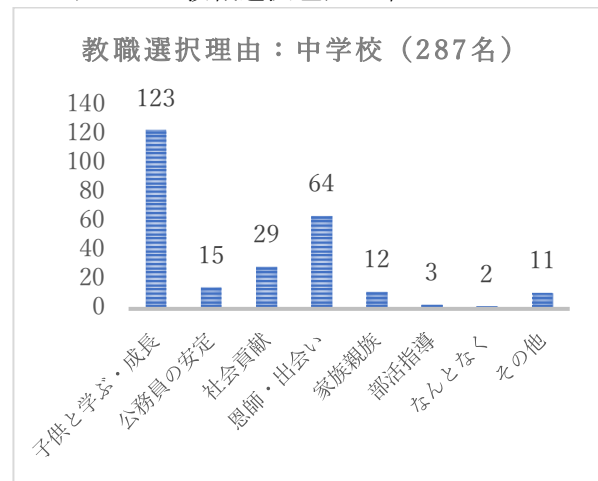
**5-1 初任者研修初回調査から（2019.04.03）**

(1) 教職を選択した最も強い理由を 1 つ選んでください。

グラフ 1 教職選択理由 小



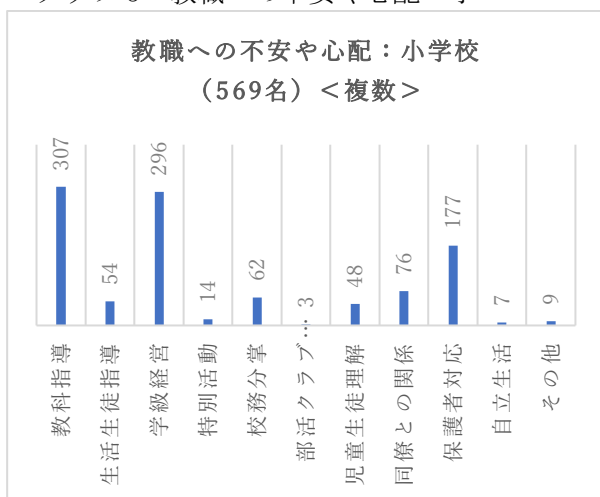
グラフ 2 教職選択理由 中



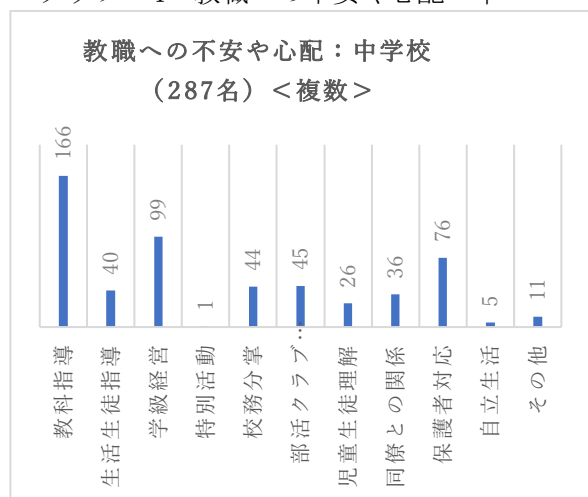
教職を選択した理由として、「子どもたちに教えたり、共に学ぶのが好き」「恩師や良き教師との出会い」の 2 項目合計で小学校は 76%、中学校 65%を超えている。昨年の調査もほぼ同様の結果であった。

(2) 教職をスタートするにあたっての不安や心配で、特に強く思っていることを 2 つ選択。

グラフ 3 教職への不安や心配 小



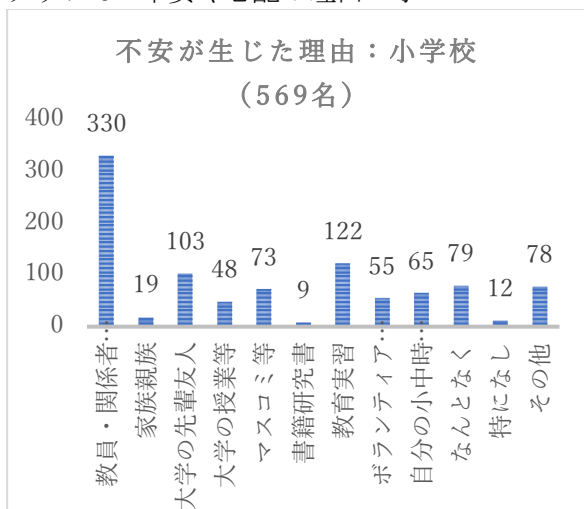
グラフ 4 教職への不安や心配 中



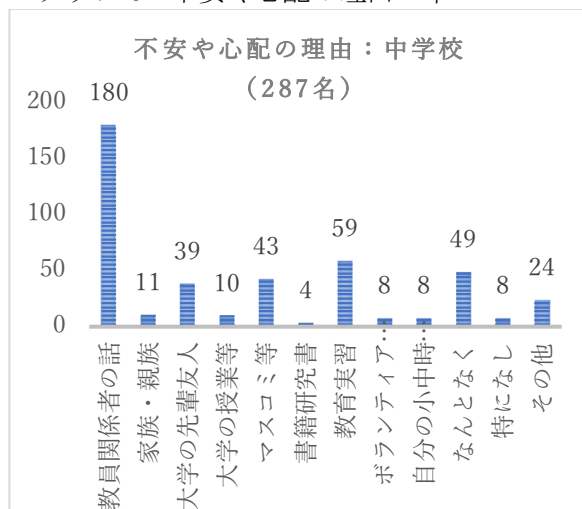
小中学校ともに「教科指導」「学級経営」「保護者対応」が上位を占めている。

(3) 教職に対しての不安や心配を持つ理由やきっかけは何か2つ選択。

グラフ5 不安や心配の理由 小



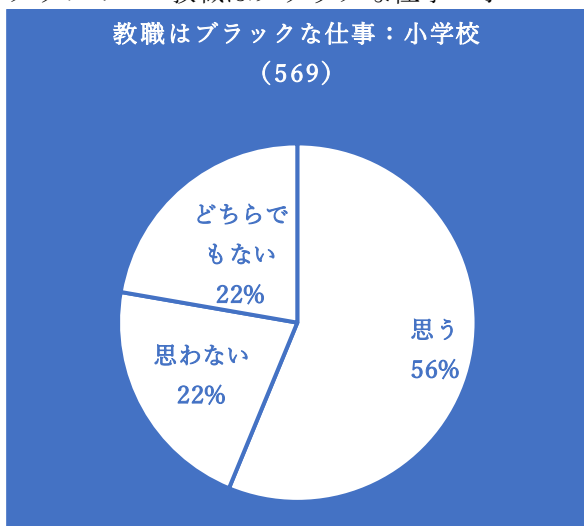
グラフ6 不安や心配の理由 中



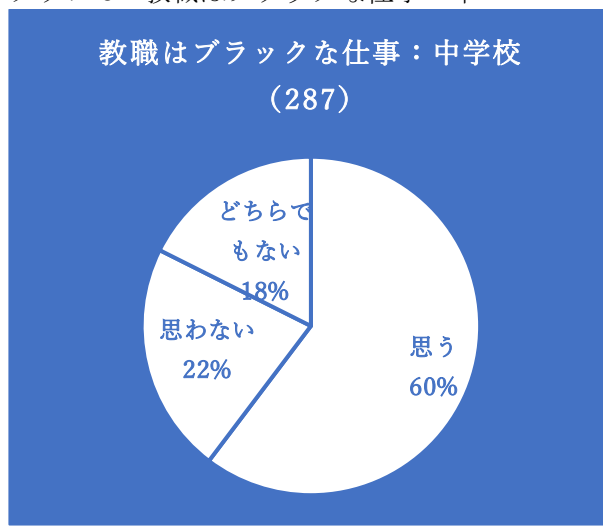
教職生活をスターするに際して、不安や心配を抱えてはいるが、その不安や心配のきっかけとなる事項として、「教員、学校関係者からの話」が小中とも圧倒的に多い。一方、「マスコミ報道等」「なんとなく」という外部情報や理由をつかみ切れていない漠然とした思いも抱えている。

(4) 教職はいわゆる「ブラックな仕事」だと思いますか。

グラフ7 教職はブラックな仕事 小



グラフ8 教職はブラックな仕事 中

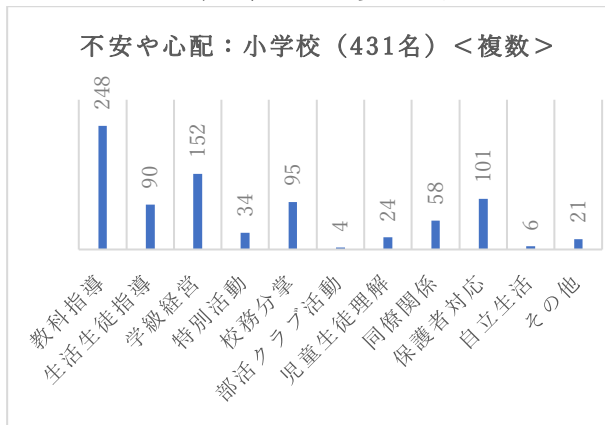


教職がブラックな仕事であると思うかの問いかけに対して、小学校では56%、中学校では60%の者がブラックだと感じているとの結果が出る。

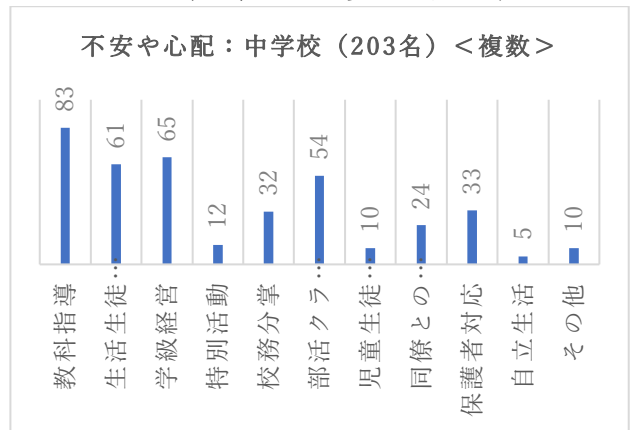
## 5-2 初任者研修終了後の調査から (2020.01.28~02.06 実施)

(1) 初任者として約1年を経て、現在、教職の仕事で不安なことや心配なことで強く思っていることを2つ選択。

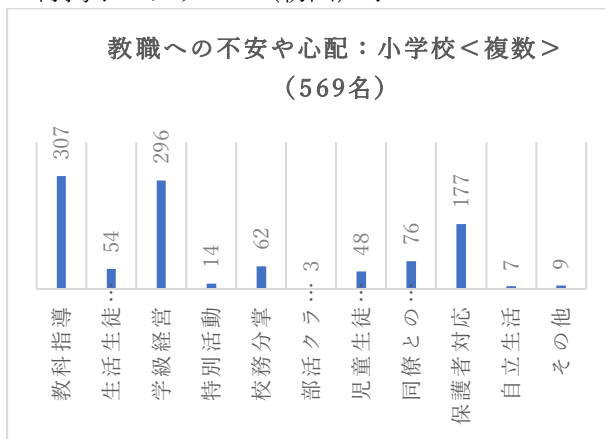
グラフ9 1年を経ての不安・心配 小



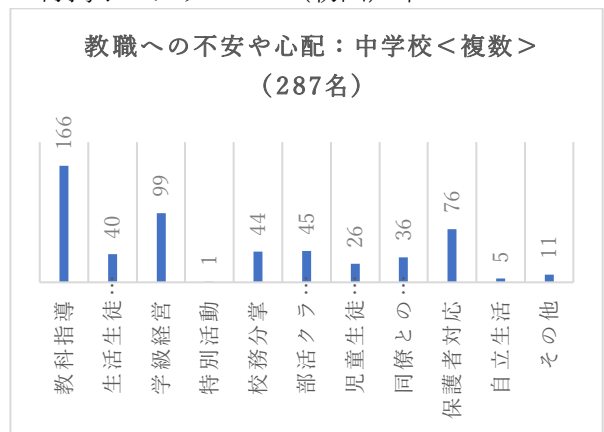
グラフ10 1年を経ての不安・心配 中



再掲示 グラフ1（初回）小



再掲示 グラフ2（初回）中

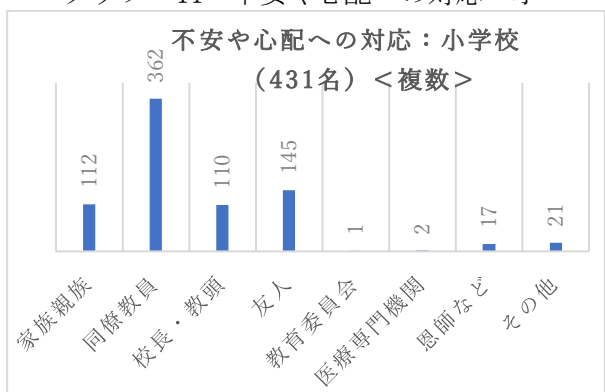


小学校教諭は、初回のアンケート結果では「教科指導」「学級経営」「保護者対応」の3項目が圧倒的に多かったが、1年を経て、最終回でのアンケート調査では、「教科指導」「学級経営」「保護者対応」の順位は変わらなかったが「生活生徒指導」「校務分掌」の比率が伸びた結果となった。

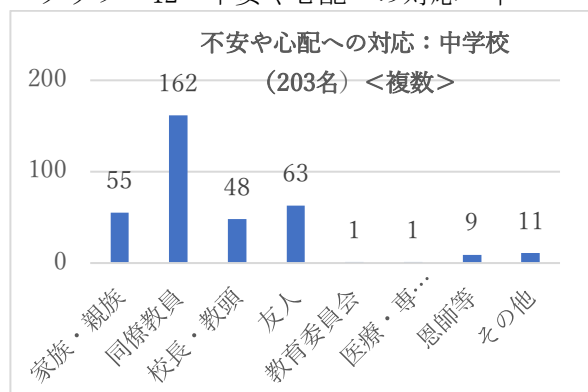
中学校教諭においても、「教科指導」「学級経営」「保護者対応」の3つの項目が多かったが、1年を経てのアンケート調査結果では「教科指導」「学級経営」「生活生徒指導」「部活動・クラブ活動」の順に多く、「保護者対応」の順位がかなり下がっていた。

(2) 教職への不安や心配について1年を経て、どう対応（相談）したか。2つまで選択。

グラフ11 不安や心配への対応 小



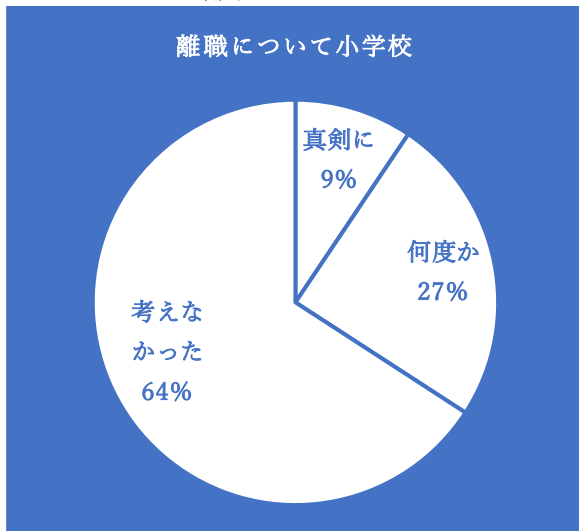
グラフ12 不安や心配への対応 中



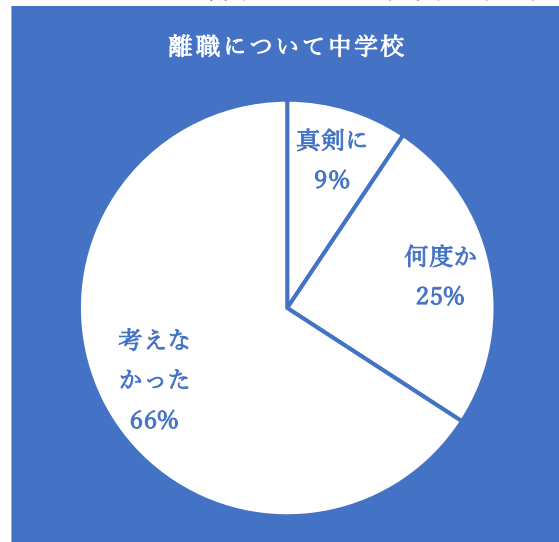
この1年間の教職生活で不安や心配に対する対応として、小学校、中学校とも約8割の教員が同僚教員に相談するの選択肢を選んでいる。続いて友人と家族・親族と続き、その後校長・教頭を選択している。

(3) 初任者として1年間仕事を続ける中で離職について真剣に考えたか。

グラフ 13 離職について 小



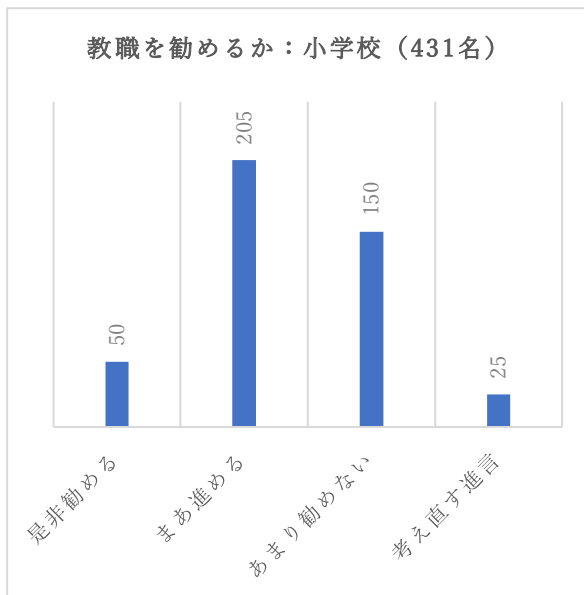
グラフ 14 離職について中学校 (203)



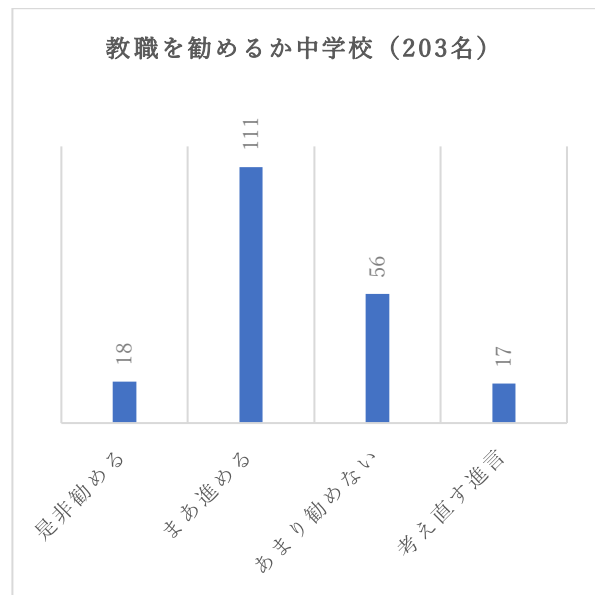
小学校中学校とも、離職を真剣に考えた者は9%で約1割である。

(4) 現在、学生から教職に就きたいと相談されたら、あなたは勧めるか。

グラフ 15 教職を勧めるか 小



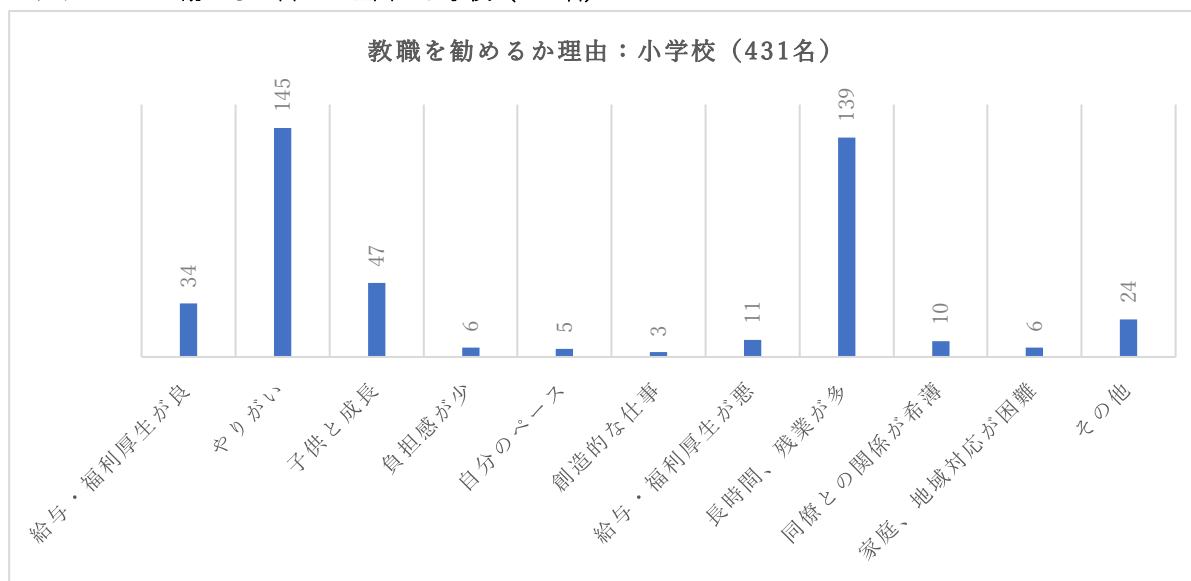
グラフ 16 教職を勧めるか 中



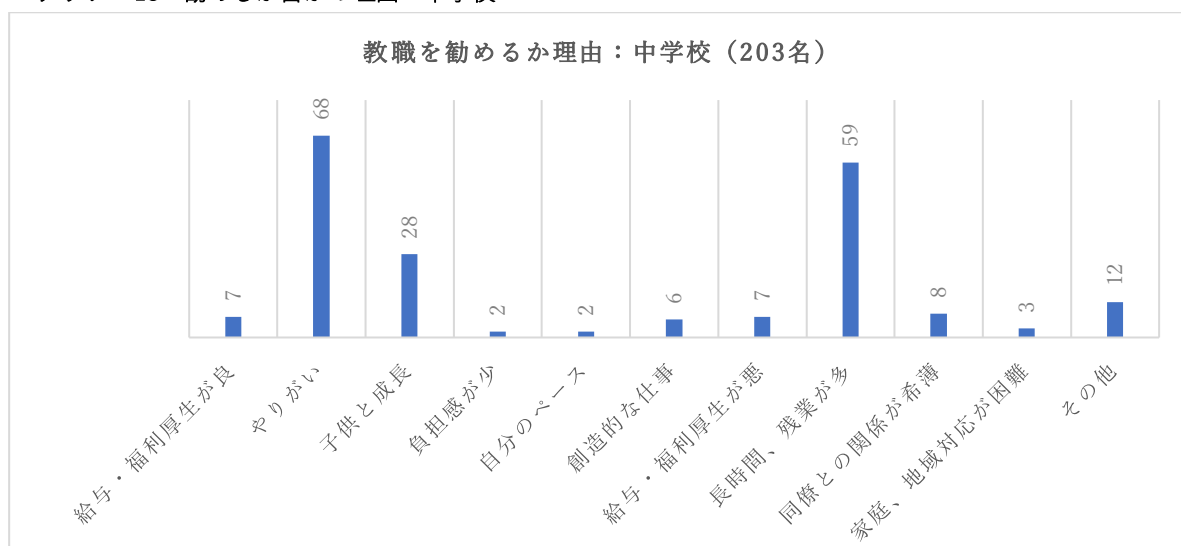
小学校中学校とも6割の教員が教職を「ぜひ」、「まあ」と勧め、小学校の35%、中学校の28%が「あまり勧めない」と回答し、小学校の6%、中学校の8%が「考え直すように進言する」と回答している。

(5) 学生に教職を勧めるか否かの理由を1つ選択。

グラフ 17 勧めるか否かの理由 小学校 (431名)



グラフ 18 勧めるか否かの理由 中学校



小学校、中学校とも教職を「ぜひ」「まあ」勧める理由として選択したのは「多忙だがやりがいのある仕事」(小学校 34%、中学校 33%)である。一方、「あまり勧めない」「考え直すよう進言する」と回答とした理由は「長時間労働、残業が多い」(小学校 32%、中学校 29%)である。続いて、「ぜひ」「まあ」勧めるでは、「子どもたちと共に成長できる」(小学校 11%、中学校 14%)である。小学校と中学校との相違としては「給与・福利厚生」の安定性を選択した小学校教員が8%に比較して、中学校教員は3%であった。

(6) 教職を勧めるか否かとその理由とも関係

そこで、「教職を勧めますか」の質問の回答(勧めるか否か)がどんな理由を選択したのかクロス集計を行った。やはり勧める派(「ぜひ」「まあ勧める」)は「多忙だがやりがいがある仕事」「子



どもたちと共に成長できる仕事」を選択し、勧めない派（「あまり勧めない」「考え直すよう進言する」）は「長時間労働、残業が多い」を選択している。

表 1 勧めるか否か × 理由 小学校

	進言	あまり	まあ	ぜひ
A	0.0%	0.4%	11.7%	1.7%
B	0.0%	1.7%	50.4%	10.9%
C	0.0%	0.0%	14.3%	6.1%
D	0.0%	0.4%	1.3%	0.9%
F	0.0%	0.0%	2.2%	0.0%
G	0.0%	0.4%	0.9%	0.0%
H	0.4%	3.5%	0.9%	0.0%
I	7.0%	48.3%	4.3%	0.4%
J	1.3%	2.2%	0.9%	0.0%
K	0.9%	1.7%	0.0%	0.0%
L	1.3%	6.5%	1.7%	0.9%

表 1 勧めるか否か × 理由 中学校

	進言	あまり	まあ	是非
A	0.0%	0.0%	6.7%	0.0%
B	0.0%	1.0%	55.2%	8.6%
C	0.0%	1.9%	18.1%	6.7%
D	0.0%	0.0%	1.9%	0.0%
F	0.0%	0.0%	1.9%	0.0%
G	0.0%	0.0%	5.7%	0.0%
H	0.0%	5.7%	1.0%	0.0%
I	12.4%	35.2%	8.6%	0.0%
J	2.9%	2.9%	1.9%	0.0%
K	0.0%	1.9%	1.0%	0.0%
L	1.0%	4.8%	3.8%	1.9%

## 6. 考察と課題（教職支援の手がかり）

### 6-1 「教職を選択した理由」（2019.04.03 スタート時） 【グラフ 1.2】

新採用教員としてスタートして、三日目。改めて教職を選択した自分に対するの自問としての質問である。「子供たちに教えたり、ともに学ぶことが好き」との回答が小学校で46%、中学校で43%である。これから学校現場で子供たちと過ごすことの意気込みも込めて回答した者も少なくないだろう。実務家教員の立場からの期待値は70%程度を見込んでいたが、この点からするとやや期待外れである。しかし、この回答率に続くのが「恩師や善き教師との出会い」（小学校30%、中学校22%）であり、おそらく、自分が児童生徒時代に恩師や善き教師から受けた授業や学校生活での充実が教職を選択した強い理由になっているだろうと考えれば、ほぼ期待値の70%に達することになる。

この結果からの教職支援への手掛かりとしては、学生時代に「子供たちに教えたり、ともに学ぶことが好き」に出会える機会をできるだけ豊富に用意することであると考えられる。もちろん、現実の学校現場では「子供たちに教えたり、ともに学ぶこと」の厳しさもある。厳しい現実に向き合う困難な学校についての学びを用意することも必要だろう。本学部では教職支援室<sup>(10)</sup>を設置し、様々な学校体験を用意しているが、積極的に参加する学生は多いとは言えない。また、厳しい現実に向かう学校の姿や教員の声を、教職の魅力ある学校の姿や教員の声と共に学ぶ場を設ける必要があるだろう。魅力だけを学べば現実適応がむずかしくなり、困難だけを学べば学校と教職への失望となる。まさに学校は社会の縮図であるから、光と影を学べるカリキュラムが必要なのかもしれない。

### 6-2 「教職への不安や心配」（初任者研修スタート時 及び 初任者研修修了時）

#### 【グラフ 3.4.5.6.9.10.11.12】

教職スタート時の「教職への不安や心配」は小中学校とも「教科指導」「学級経営」「保護者対応」の3項目が圧倒的に多い。1年を経て、最終回でのアンケート調査では、小学校が「教科指導」「学級経営」「保護者対応」の順位は変わらなかったが「生活生徒指導」「校務分掌」の比率が伸び、中学校では、「教科指導」「学級経営」「生活生徒指導」「部活動・クラブ活動」の順に多く、「保護者対応」の順位がかなり下がった。

つまり、現実に教職生活に身を置いてみると様々な課題が教職生活にはあることを実感したといえるだろう。

ここで気に懸かるのは、スタート時に不安や心配を抱くきっかけとして、小中学校とも「教員、学校関係者からの話」が圧倒的（小学校 58%、中学校 63%）に多いことだ。続いての理由は教育実習（小学校 21%、中学校 21%）だが、教育実習は 4 週間前後の期間であり、大学を離れて初めての教壇デビューであり、緊張感は並大抵のものではないだろうからその時に感じた教員像は不安や心配を抱くきっかけになる可能性は高いと考えられる。しかし、それよりも「教員、学校関係者からの話」がきっかけになるというのは今後の課題でもある。もちろん、この中には教育実習時にその実習校の教員や学校関係者からの話も含まれているだろう。いずれにしても、教員や学校関係者が「学校の教員は大変だよ。子ども相手だから時間も不規則だし、保護者の対応まである。」などといった自分の苦労話を一般的な現実に置き換えて話していることは考えられないだろうか。それほど自覚なく、実務家の経験から考えると、どこの学校でも教員同士は挨拶を交わすときにも、天気の話の次は苦労話で「大変だね、疲れるね」が枕詞に出ることが多い。「いいえ、大したことじゃないですよ」「そんなに疲れてなんかいませんよ。面白いじゃないですか」などと答えようものなら会話が続かなくなるという経験を何度もしたくらいである。このような教員文化の一面に過ぎないことをまともに実習生が感じていたら教職への不安は増すばかりになる可能性はある。

確かに大変な状況や課題はあるが、同時に、子どもたちの成長を実感したり、子供たちとの心の交流に教職の魅力があることを「教員、学校関係者」が実習生や学生に伝えていたかどうかは気に懸かる。

また、「マスコミ報道等」「なんとなく」を合わせると、小学校 27%、中学校 32%になる。これは自身で真意を明らかにすることなく、知らず知らず漠然と教職への不安を抱く情報に接している現実があることが伺える。

これらの結果からの教職支援への手掛かりとしては、教科指導や学級経営について、一つには、教科指導、学級経営に関わる大学での学びに教科や教科教育、学級経営の理論と共に、実践的な教科指導事項、例えば、子どもの目線や発達の段階を踏まえた興味関心や学習意欲を引き出す指導の在り方など授業実践を踏まえた模擬的な空間を用意する必要がある。学級経営においても臨牀的な模擬場面から逆に理論へと還元した学びが用意できないかということである。

二つには、将来学校現場における、教科指導や学級経営の諸課題を解決する上で、また、一人一人の教科指導や学級経営の学びだけでなく、学生同士での教材開発や模擬授業実践の場を設けるなどである。できれば、現職教員を交えた各教科教育や学級経営の授業で実践的な演習を半期、または通年で履修できれば可能性は広がると考えられる。体験的な学びは見通しと自信につながると考えられる。

### 6-3 「教職はいわゆるブラックな仕事」「離職を考えたか」「教職を学生に勧めるか否か」 【グラフ 7, 8, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 表 1, 表 2】

昨今の教員の勤務実態調査<sup>(11)</sup>や働き方改革に関するマスコミ報道<sup>(12)</sup>によって、教員だけでなく、本学部の教員養成課程で学ぶ学生たちも教員のいわゆるブラック問題への関心は高い。本調査においても、スタート時にすでに小学校では 56%、中学校では 60%の者が教職はいわゆるブラックな仕事だと感じていると回答している。「思う」と回答した理由としての記述では、やはり「長時間労働」、「残業時間」、「手当が支給されない」、「部活動がボランティア扱い」、「保護者の理不尽な要望や「対応」を挙げている。一方、「思わない」と回答した理由として「やりがいがある」「勤務時間というよりは自分のペースで仕事ができる」「子ども相手の楽しさがある」「好きな仕事ができる」「給与も福利も民間時代よりは保障されている」などが挙げられた。

新採用 1 年を経て後の「離職を考えたか」では小学校中学校ともに「真剣に考えた」と回答したのは 9%、約 1 割だったが、この数字は一昨年度、昨年度の調査でも若干の差はあるがほぼ同様の割合である。

同じく新採用 1 年を経て後の「教職を学生に勧めるか否か」では、「ぜひ」「まあ」の勧める派

が約6割で、小学校の6%、中学校の8%が「考え直すように進言する」と回答している。これら勧めるか否かとその理由についてのクロス集計では、「ぜひ」「まあ」の勧める派が「多忙だがやりがいがある仕事」「子どもたちと共に成長できる仕事」を選択し、勧めない派（「あまり勧めない」「考え直すよう進言する」）は「長時間労働、残業が多い」を選択している。

約6割の新採用者が初任の1年を経て、教職はいわゆるブラックな仕事であると感じているが、一方で、「教職を学生に勧めるか否か」では、「ぜひ」「まあ」の勧める派が約6割いるというのは、学校にいる時間が長時間であること、仕事量がかなり多いと感じていること、にもかかわらず、教職の仕事が教員各自のペースや裁量も影響しているとの複雑な思いを持っているのではないかと推察される。

昨年度の調査<sup>(13)</sup>では、「仕事は過重で、かなり多忙な仕事である」と思う者が小中学校合わせて890名(92%)いるが、その一方で、「やりがいを感じる仕事である」(94%)「社会に貢献していると感じられる仕事」(81%)「教職は自分に合っていると思われる仕事」(76%)と教職に就いて1年間勤務した後に肯定的にとらえている。また、何かと社会で話題になる収入に関する思いとして、多忙で過重な労働環境で収入が見合わないマスコミ報道などでは話題になるが、実際は高収入であると「強く思う、まあ思う」と感じている者が86%いた。

これらの結果からの教職支援への手掛かりとしては、やはり、教職という職業観について、多面的多角的な視点から学ぶ必要を感じる。我々は教職を専門職と考える一方で、医者や弁護士、理学療法士、薬剤師とは異なった感覚での専門職として眺めていないだろうか。本学部では卒業要件として教員免許の取得を設けているが、一方で教職につかず一般企業等へ就職することについてもそれほど違和感を感じていない者も少なくない。大学教員と学生、学生同士での教職観について議論する場を設けてもいいのかもしれない。また、ブラック感などは一般企業や一般公務員の職場との比較検討する機会を設けてもいいのかもしれない。いずれにしても教職という職業を内外から考え直す学びの場を設けることが望まれる。

## 7. おわりに

「教員養成支援の手がかりを求めて」をテーマに今回を含め、初任者の意識について、特に、離職、不安や心配な点、教職への思い（教職の魅力と困難など）について3年間の調査を重ねた。この間、新採用としてスタートしたにも関わらず1年間という初任者期間終了を待つことなく離職した者もいる。（平成31年度の初任者研修参加者では小学校4名、中学校2名が離職）<sup>(14)</sup>

このテーマでの研究は今回の調査で区切りとするが、これまでの3回にわたる調査を振り返り、実務家教員としての立場から、大学における教員養成カリキュラム実施にあたって、次の3点が今後の課題になるのではないかと考える。

### (1) 教職観へのアプローチ（教職という専門職の自覚を育成する）

教職とは特別な資格を持つ専門職である、ということの自覚を持って教員を目指していくことが必要ではないか。

例えば、埼玉県では、教員採用試験の募集<sup>(15)</sup>で次のような教員像を提示している。<sup>(註2)</sup>

- ・「健康で、明るく、人間性豊かな教師」（子供をよく理解し、自らも学び続け、子どもとの間に温かい人間関係が築ける人）
- ・「教育に対する情熱と使命感を持つ教師」（子供に対する愛情と教育者としての責任を持ち、常に子供の立場に立った指導ができる人）
- ・「幅広い教養と専門的な知識・技能を備えた教師（幅広い教養と専門的な知識・技能を備え、子供にとってわかりやすい指導ができる人）」

これらの要件をすべて満たしている教員を探す方が実際は難しいだろう。しかし、教員である以上ここに示された教員像を目指すことは誰もが期待している。

だとすれば、教職とはやはり崇高で、深い専門職としての自覚を必要とする仕事であり、医者や弁護士、薬剤師、理学療法士といった職と並んでもおかしくない職だと考えられないか。この

ように言うと、全国で100万人近くいる教職につく教員を医者や弁護士とは同列には考えられないだろうと否定される事が一般的だ。

だが、敢えて、教職という専門職を職業とすることの意義と誇りを教育学部に在職する大学教員と学生、学生同士、一般社会人と教員が職業観を見直す観点から議論してみてもどうだろうか。また、教師、医師、弁護士、理学療法士、保育士といった、人間の命や生活、育ちを扱う専門職の中で、いわゆる「ブラックな仕事」とは何か、働き方改革とは何かを考えることも重要ではないかと考える。そのためのカリキュラムや授業を組み入れる必要がある。

### (2) 教職への不安や心配への対応（独りで背負うのではなく、チームで解決する学校課題）

教職への不安や心配について今回の調査と共に、一昨年、昨年の調査も含めて感じられるのは、どうも、教員は様々な教育課題を独りで解決しようとする姿勢が強いのではないかと、ということである。「教科指導」「学級経営」「保護者対応」、「生徒指導」の不安や心配、悩みに対峙するとき、解決に向かって、まず、自身はどうすべきか、自身の何が足りないのか、と独りでの対応案を探る傾向にないだろうか。学校は組織体であり、学校教育活動は独りではできない。うまく事が運んでいるときは専門職としての個人の力を発揮していればよいが、課題に直面した時は遠慮なく組織としての力を頼る必要がある。この視点を大学の教員養成課程での学びに取り入れることで、教員としてスタートする際の心構えが広がると考える。

最近ではコミュニケーション能力が盛んに話題になっているが、組織的な活動には、コミュニケーション能力だけでなく、フットワーク能力（だれにでも協力を要請する力）が必要だ。つまり、自分一人でなんとか、自分のテリトリーを守らなければ、といった考えでは現代の教育課題は対処できない。学校という組織体でさえ、関係諸機関との協力が必要となる場面が多く、関係機関と連携できない学校は増々課題を抱えることになるという状況だ。

今後の教員養成の段階でも、各自の資質能力の向上とともに、チーム学校、組織としての教師集団、同僚性についての学びやカリキュラムを用意したい。

### (3) 教職を目指す学生に対する進路指導、キャリア教育の再考

本学部に入學した学生たちは入學当初は約9割の学生が教職を志望しているにも関わらず、実際教員として卒業していく者は約半数であり、その理由の一つに「教職ブラック問題」を挙げる学生が少なくない。中には、教員を目指していたが、友人や先輩、そして保護者から「教職ブラック問題」を心配されることで、教職を諦めてしまう者も少なくない。また、今回の調査で新採用教員たちは「教職を選択した理由」として、「子どもたちに教えたり、共に学ぶのが好き」「恩師や良き教師との出会い」を回答しているが、本学部の学生たちの入學当初の調査でも同様の回答をする学生が少なくない。にもかかわらず半数（平成30年度の教育学部卒業生（450名）の教員への就職率は、48.9%＜220名＞）が教職に就かない現実をどう考えたらいいのだろうか。

もちろん、職業選択の自由は自明である。大学時代にも多くの出会いをはじめ、主権者としての自覚や視野を広げる機会もあり、当初の進路を変更することも考えられる。しかし、その結果、半数以上が教職に就かないのである。そこで、私が考える大学における学生と教員ミスマッチ仮説を同時に今後の自身の課題にしたい。

本学の学生たちの多くは専門職の教職を目指して教育学部に入学してくる。入学した後、彼らは、教育学部に入学したのだから、大学の先生やスタッフは教職に就くための学びを提供してくれるだろう、教職や学校に関する技能（ノウハウ）を高めてくれる学びを提供してくれるだろう、教員採用試験対策のサービスもしてくれるだろう、と受け身的に考えている学生が少なくないとしたら…。

一方で、受け入れた大学側は、教育学部に入学し、晴れて大学生になったのだから自主自立した生活を行い、自ら教職への意識を高め、学生自身が教職に必要な単位を取得し、多くは教員としてスタートするだろう、そしてある者は教育関係の研究など進学することだろうと考えている大学教員が少なくないとしたら…。

このミスマッチがもしも本学部においてもあるとするなら、大学における進路指導、キャリア

教育について再考しなければならない。もちろん、大学入学までの小中高校で、彼らは進路指導について学んでいる。<sup>(16)</sup>しかし、いくつかの調査や研究では高校進学、大学進学が目の前にあるために進路指導が進学指導になり、生き方としての進路指導、キャリア教育の指導の実践については課題が多く大学進学後にも課題があることが言われている。<sup>(17)</sup>

今後は入学後の早い段階で、教職を目指す大学生としての進路指導、キャリア教育のカリキュラムを準備する必要があると考える。

## 註

(1) 2019年4月から「働き方改革法」の施行が始まり、社会的な課題として、いずれの企業や職業、産業の各界で、働き方改革、ワークライフバランスといった課題解決に向けて試行錯誤している。学校の教員もまた例外ではない。充実した教職生活には各自の働き方を見直すとともに、組織としての学校という職場の改革も求められている。

(2) 同様に、平成32年度採用さいたま市立小中学校等教員採用選考試験実施要項には、さいたま市が求める教師像として、「豊かな人間性と社会性」「強い使命感と教育への情熱」「幅広い教養と実践的な専門性」を備えた常に学び続ける教師、が示されている。

その他、東京都の場合は「1教育に対する熱意と使命感をもつ教師 2豊かな人間性と思いやりのある教師 3子供のよさや可能性を引き出し伸ばすことができる教師 4組織人としての責任感、協調性を有し、互いに高め合う教師」(東京都)が示されている。

なお、文部科学省中央教育審議会答申(平成17年10月26日)第2章(1)あるべき教師像の明示として、「優れた教師の条件には様々な要素があるが、大きく集約すると次の3つの要素が重要である」として、次の3点を掲げている。

### 1. 教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感などである。また、教師は、変化の著しい社会や学校、子どもたちに適切に対応するため、常に学び続ける向上心を持つことも大切である。

### 2. 教育の専門家としての確かな力量

「教師は授業で勝負する」と言われるように、この力量が「教育のプロ」のプロたる所以である。この力量は、具体的には、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるものと言える。

### 3. 総合的な人間力

教師には、子どもたちの人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と同僚として協力していくことが大切である。

## 謝辞

一昨年、昨年同様、今回の研究にあたっては県教育委員会の初任者研修担当の各関係者、特に研修実施事務を担当された埼玉県総合教育センターの皆様には多大なご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。また、総合教育センターの鹿兒島徹様には各種資料の編集にあたって大変なご足労をおかけしましたことを感謝とともにお詫び申し上げます。

## 参考文献

- (1) 平成30年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について 文部科学省 平成31年4月
- (2) 平成31年度埼玉県公立学校教員採用選考試験志願状況埼玉県教育委員会 平成31年6月

- (3) 「今後の教育学部における教職支援の在り方」大澤利彦他 埼玉大学教育学部附属教育実践センター紀要 No.18 2020 1-8 項
- (4) 教員勤務実態調査(平成28年度)(確定値)について 平成29年10月
- (5) 「学校が壊れる」週刊東洋経済 2019.09.16
- (6) 「学校における働き方改革基本方針」の策定について 埼玉県教育委員会 R1年9月
- (7) 「教員養成支援の手がかりを求めて」埼玉大学紀要 教育学部 67(2) 189-210 2018
- (8) 「教員養成支援の手がかりを求めてⅡ」埼玉大学紀要 教育学部 68(2) 217-245 2019
- (9) 埼玉県教育委員会総合教育センター初任者研修プログラム(全15回) 平成31年4月
- (10) 研究者教員7名と実務家教員6名及び事務局員2名の計15名によって構成され、様々なプログラム、地元教育委員会、全国自治体の教員採用情報の収集、各種相談業務、学校教員ボランティア募集など教員学部学生、教職大学院生の教職支援をサポートしている。
- (11) 再掲 (4)
- (12) 再掲 (5)
- (13) 「教員養成の手掛かりを求めてⅡ」埼玉大学紀要 教育学部、68(2) 2019 232-233 項
- (14)

	小学校採用数(離職者)	中学校採用数(離職者)
平成29年度採用	756名(9名)	460名(7名)
平成30年度採用	599名(9名)	365名(4名)
平成31年度採用	569名(4名)	287名(2名)

- (15) 平成31年度埼玉県公立学校教員採用選考試験要項 1項
- (16) 「キャリア教育」資料集— 文部科学省・国立教育政策研究所 —研究・報告書・手引編 平成30年度版  
「埼玉県進路指導改善検討委員会 報告書」平成27年3月 埼玉県教育委員会
- (17) ・ベネッセ教育研究所「第5回学習指導基本調査 9教員が抱える進路指導上の課題」2010  
[https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/shidou\\_kihon5/kou\\_dai/dai\\_14.html](https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/shidou_kihon5/kou_dai/dai_14.html)  
・「大学のキャリア支援—実践事例と省察」上西充子他 経営書院 2007  
・「現代日本の教師」油布佐和子 放送大学教育振興会 2016 80-83 項

## 資料

(1)

2019年度新採用教員アンケート

2019.04.03

埼玉大学で教育学部の教職大学院、学部での教員養成に係る仕事に従事しております。研究の一助とさせていただくことからアンケートへのご協力をお願いします。なお、個人が特定されるようなことはありません。ぜひよろしくをお願いします。埼玉大学教育学部 教授 安原輝彦

◎プロフィールについて 該当項目を○で囲み、( )には該当事項をご記入して下さい。

・年齢・性別	男 ・ 女 ( ) 歳
・所属等	小学校 ( ) 年担任 ・ 特別支援学級担任 ・ 副担当 中学校 ( ) 年担任 ・ 副担任 教科 ( ) 養護教諭 小学校 中学校 他 ( )
・採用前	臨時的任用経験(6か月以上) 有 ・ 無 一般企業勤務経験(6か月以上) 有 ・ 無
・卒業・修了学部等	教育学部系 ・ 教育学部系以外 ( ) 部
・埼玉県教員以外の受験の有無	有 ( 公立学校 私立学校 ) 無 一般企業等 一般公務員

1. 教職を選択した最も強い理由を1つ選んでください。【 】

A: 子供たちに教えたり、共に学ぶことが好き B: 公務員(給与・福利厚生)の安定性 C: 教育の専門職(人材育成)

として社会貢献できる D: 恩師や善き教師との出会い E: 家族・親族の影響 F: 部活での指導を願って  
G: 特に理由はない(なんとなく) H その他( )

2. これから教職をスタートするにあたって、不安なことや心配なことについて、特に強く思っていることを下の中から2つ選んで下さい。 【 】【 】

A: 教科指導(授業や教材研究) B: 生活生徒指導 C: 学級経営 D: 特別活動 E: 校務分掌  
F: 部活動・クラブ活動 G: 児童生徒理解(子供との人間関係) H: 同僚(教員同士)との人間関係  
I: 保護者対応 J: 自立した生活 K: その他( )

3. 「2」の質問で、あなたが教職に対しての不安や心配を持つようになった理由やきっかけは何ですか?  
下の中から2つまでを選んでください。(特に不安にない方はKを選択) 【 】【 】

A: 教員、学校関係者からの話 B: 家族や親族からの話 C: 大学の先輩や友人からの話  
D 大学の講義・演習・ゼミなどから E 新聞やテレビなどの報道から F 出版物・学術書の研究から  
G 教育実習の体験から H 学習ボランティア等の体験から I: 自分の小中学校時代の記憶から  
J: なんとなく回りから聞こえてくるので K: 特に不安はない  
その他( )

4. 教職はいわゆる「ブラックな仕事」だと思いませんか? 【 】に○を付けてください。

- ① 思う人は、なぜそう思うのか理由を簡潔にお答えください(キーワードでも結構です)  
② 思わない人は、なぜ思わないのですか理由を簡潔にお答えください(キーワードでも結構です)

思う(かなり思う)【 】 思わない(あまり思わない)【 】 どちらでもない【 】

理由 \_\_\_\_\_

(2)

2019年度新採用教員アンケート II

2020.1月

埼玉大学で教育学部の教職大学院、学部での教員養成に係る仕事に従事しております。研究の一助とさせていただきますこと  
からアンケートへのご協力をお願いします。なお、個人が特定されるようなことはありません。ぜひよろしくお  
願いします。

埼玉大学教育学部 教授 安原輝彦

◎プロフィールについて 該当項目を○で囲み、( )には該当事項をご記入して下さい。

・年齢・性別	男・女 ( ) 歳
・所属等	小学校 ( ) 年担任・ 特別支援学級担任 ・ 副担当 中学校 ( ) 年担任 ・ 副担任 教科 ( ) 養護教諭 小学校 中学校 他 ( )
・採用前	臨時的任用経験(6か月以上) 有・無 一般企業勤務経験(6か月以上) 有・無
・卒業・修了学部等	教育学部系 ・ 教育学部系以外 ( ) 部
・埼玉県教員以外の受験の有無	有( 公立学校 私立学校 ) 無 一般企業等 一般公務員

1. 初任者として約1年を経て、現在、教職の仕事で不安なことや心配なことについて、特に強く思っていることを  
下の中から2つまで選んで下さい。 【 】【 】

A: 教科指導(授業や教材研究) B: 生活生徒指導 C: 学級経営 D: 特別活動 E: 校務分掌  
F: 部活動・クラブ活動 G: 児童生徒理解(子供との人間関係) H: 同僚(教員同士)との人間関係  
I: 保護者対応 J: 自立した生活 K: その他( )

2. 「1」の質問で、現在、あなたが教職に対しての不安や心配についてどのような対応をしていますか?  
下の中から2つまでを選んでください。(特に不安にない方はHを選択) 【 】【 】

A: 家族や親族に相談 B: 同僚教員(先輩教員も含む)に相談 C: 校長や教頭に相談  
D: 友人に相談 E: 市町村や、県の教育委員会に相談 F: 医療機関やカウンセリング機関に相談  
G: これまでに関わった小学校～大学までの教員(恩師など)に相談  
H: その他( )

3.初任者として1年間仕事を続ける中で、真剣に離職、転職を考えたか。【 】

- A 真剣に考えたことがある    B 何度か考えた    C ほとんど考えることはなかった

4.現在、学生から教職に就きたいと相談されたら、あなたは教職を勧めますか。【 】

- A ぜひ勧める    B まあ勧める    Cあまり勧めない    D考え直すよう進言する

5.「4」の設問の回答に最も近い理由を下の中から1つ選んでください。【 】

- A 安定した生活条件（給与・福利厚生）    B 多忙だがやりがいのある仕事  
 C 子どもたちと共に成長できる仕事    D 思っていたより負担感は少ない  
 F 自分のペースで仕事に取り組める    G 創造的で変化に富んでいる  
 H 生活条件が悪い（給与や福利厚生が低い）    I 長時間労働、残業が多い  
 J 教員同士のチームワーク、人間関係が希薄    K 家庭や地域対応が困難  
 L その他（    )

(2020年3月31日提出)

(2020年4月10日受理)